

幕

からころと絞首台の鐘が鳴ります。即席の絞首台の鐘の代わりに使われたのは、主人を失った酒場のドアベルでした。

この村は閉じています。
殺人からの裁判は、村の衰退に拍車をかけ、
まもなく本当に住民は絶えるでしょう。
そして、かつて『店主／アルヴァン』が望んだものは永遠に失われます。

本当は狩るべき『オオカミ』なんていませんでした。
ここにいたのは、人に人と呼んでももらえなかったもの。
あ俺達の疑心暗鬼があぶりだしたのは、あ俺達の中の『狼』です。

……誰も死ななかった。
誰も吊るし上げられることなく、話し合いは終わった。

思い込みで突っ走って、無実の少女を傷つけた。
人を人とも思わない俺こそが、誰より狼だった。裁かれるべきだった。

わかっている。理解している。痛感している。
俺こそがオオカミで、それでいい。だけど、ああ、ああ！

……だれか。だれでもいい。
人間の俺を、見てくれ。

+++++

エンディングC：『オオカミは闇のなか』